

第34号

年4回発行  
無料

創刊 2012年1月16日

発行所 NPO法人 HUG

〒151-0053

東京都渋谷区代々木 2-10-9-8F

e-mail: info@h-u-g.jp

よきことを、よきひとへ。

## 東北復興新聞

復興現場の今がわかる  
「好事例」共有メディア  
WEB版▶http://www.h-u-g.jp

## 目次

## 4面 [特集]



[宮城県石巻市 蛤浜]

住民5人の浜に1万人を集客  
ゼロから描く地域のビジョン

## 6面 [東北のいま]

大堀相馬焼を世界へ  
“4代目”松永窯の挑戦

## 7面 [ふくしま復興]



[福島県南相馬市小高区]

課題こそが一番のビジネスチャンス  
避難指示解除へむけ準備拠点

3年越しの進水式



宮城県石巻市 狐崎浜で新造船「大洋丸」の進水式が行われた。同じ浜の漁師たちが、自分たちが送った祝いの大漁旗を取り付ける。

## Policy

Policy  
PICK UP  
DATA

## 福島県 2014年度重点事業

| 13の重点プロジェクト       | 事業費<br>(単位: 億円) |
|-------------------|-----------------|
| 人口減少・高齢化対策        | 1,423           |
| 環境回復              | 2,455           |
| 生活再建支援            | 1,443           |
| 県民の心身の健康を守る       | 360             |
| 未来を担う子ども・若者育成     | 316             |
| 農林水産業再生           | 646             |
| 中小企業等復興           | 1,577           |
| 再生可能エネルギー推進       | 72              |
| 医療関連産業集積          | 174             |
| ふくしま・ぎずなづくり       | 51              |
| ふくしまの観光交流         | 14              |
| 津波被災地等復興まちづくり     | 888             |
| 県土連携・交流ネットワーク基盤強化 | 412             |
| 合計                | 9,831           |

※2014年度福島県総合計画より。数字は再掲事業を含む

## 福島県 2014年度重点プロジェクト

## 人口定着、風評対策に攻めの政策

子育て世代向けに  
児童預かり付きの  
コ・ワーキング  
スペースも登場

2014年5月、福島県からの県外避難者数はピーク時の約7割の4万5千854人まで減少した。県内へ人が戻りつつある中、人口の定着を図ろうと、福島県は「福島県総合計画 ふくしま新生プラン」を掲げ、復興再生を目指している。今年度の予算は約1・7兆円。重点プロジェクトとして人口減少・高齢化対策や環境回復、生活再建支援など13を設定している。

重点施策の中心となる人口減少・高齢化対策には「空き家・ふるさと復興支援事業」や「高齢者社会参加活動支援事業」などが並ぶ。なかでも特徴的なのが起業支援の「ハンサム起業家育成・支援事業」だ。「ハンサム起業家育成・支援事業」は起業相談会、実践起業塾、創業支援、子育て世代向けコ・ワーキングスペースで構成される。

女性・若者を対象に起業相談や起業塾を開催するほか、審査に通った起業希望者には必要経費の4/5以内、上限200万円を助成。必要なら専門家を派遣して事業継続や販路拡大の相談にもあたる。

女性が起業しようとするとき、家庭や育児との両立が一番の問題となる。そこで「子育て世代向けコ・ワーキングスペース」ではスペース内で利用者児童の一時預かりを行い、女性が安心して仕事に打ち込める環境を用意する。「何かをやりたいけれど、どうやっていいかわからない」という人のためには、事業計画をブラッシュアップしたり、起業家同士や働き手となる短時間労働希望者とのマッチングをしたりするなど、きめ細かいフォローアップも行う。

「風評の払拭」  
に向けた  
戦略的情報発信

そのほかに重点事業として掲げる「ぎずなづくり」においては、戦略的情報発信事業として約4億円の予算で情報発信を強化している。2013年からは「ふくしまから はじめよう」プロジェクトを始動。「福島発」「福島ならでは」の新たな取り組みを推進するとともに、民間団体などとの新たな連携や、SNS等を活用した発信を強化している。フェイスブックページの「いいね!」数は4万を越え、都道府県では全国一位。職員の顔が見える発信を行うなどの工夫に努めている。

「福島ならではの」発信としては、「再生可能エネルギー先駆けの地」を目指し、福島空港メガソーラーや洋上ウインドファーム実証研究事業など、再生可能エネルギーの研究開発にも力を入れている。また、2013年に全国のご当地キャラクターが一堂に会した「ご当地キャラこども夢フェスタ」などを開催。2014年にはアジア初上陸となるポランティアと音楽を融合したロックフェス「ロックコープス」にも参画し、「福島発」の取り組みにも力を入れている。

未だ課題も多く長い復興の道のりが続く福島県だが、こうした攻めの情報発信戦略が一つひとつ形になることで、新たなふくしまが創られていくことに期待したい。

# Ccommunity

まちづくり

【岩手県陸前高田市】

「応援株主」による新拠点・「箱根山テラス」9月開業

## 町をソーシャルビジネスの集積地へ



研修や催し、宿泊できる施設「箱根山テラス」。9月のオープンに向け建設が進む様子は、専用のフェイスブックページでもアップしている。

陸前高田市復興まちづくり会社「なつかしい未来創造」の町野弘明さん

陸前高田から大船渡へ向かう国道45号線沿いの高台に、この7月、イオンスーパーセンター陸前高田店がオープン。新たな商業施設の出店に伴い、地域経済の活性化が期待されている。一方で、被害の大きかった陸前高田駅周辺の中心市街地復興にはまだ時間がかかる。大手資本の商業施設が先行することで、駅前商店街を核としたまちづくりの効果が薄れてしまうのでは、と懸念する声もある。

市内初となる災害公営住宅（下和野団地）が今年9月に完成するなど、住民の暮らしにも明るい兆しが多々見えるものの、本格的な復興に向けた課題は多い。隣接する大船渡や気仙沼における漁業のような基幹産業がなく、第1・3次産業がバランスよく地域経済を支えている陸前高田では、シンボリックな復旧復興の姿が描きにくいという背景がある。

なつかしい未来創造は、連携する一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワークを母体として、2012年度の内閣府による雇用創造事業の一環で、気仙地域に起業家40人を輩出した実績を持つ。例えば、Uターンの若者による陸前高田産のぶどうを原料にした石鹸の販売、主婦仲間とパン製造店舗運営を行うコミュニティカフェ、海沿いの長洞集落に住む女性高齢者による水産加工品の開発販売や漁業体験の提供、米崎地区のリンゴを使った地ビール

地域から起業家を  
生み、育てたい

# Bbusiness

産業復興

Business  
PICK UP  
DATA

被災3県

水産加工業者の売上回復状況

8割以上回復は ▶ 28%

キリン絆プロジェクト 3年

## 農水産業支援・福島県を軸に1年延長へ

まちづくりに  
つながる  
協働テーマの  
産業支援

2013年からは、前年までの農業機械や養殖設備などハード中心の支援から切り替え、第2ステージとして、ブランド育成や販路拡大、人材育成などのソフト支援を実施。農業、水産業それぞれ各地域で事業者グループを選定し、助成を行ってきた。

案件形成から助成決定にあたっては、地域の協働を強く意識。事業者同士の横のつながりに加え、行政との連携も必須要件とした。

「協働ってなんですか？」という問いから始まります。強みをかけ算するのが協働。それぞれの強みを見つめ直ししよう、と。そう話すのは、キリンビール株式会社CSV推進部の古賀朗さん。そしてその狙いをこう続ける。「特に三陸沿岸部の多くの地域では、水産業はまちづくりと直結します。行政も含めた地域の連携プロジェクトにすることで、単なる商品開発や事業の成長だけに留まらず、地域全体への波及効果が見込めるのです」。ビジネスと地域社会が一緒になった取り組みは、CSV（共有価値の創造）の好事例と言えるだろう。

今年度以降、計画を延長もして中心地的に取り組むのは、福島の水産復興支援だ。「諦めずに挑戦している方がいる中、まだ我々はやり切れていない。ゼ

福島の産業に  
何が  
できる？  
原点に立ち  
返り  
考える

現在描いている青写真の一つが、ソーシャルビジネスのインキュベーション構想だ。震災から3年が過ぎ、復興予算が削減されるなか、国の支援に寄りかかっているわけにはいかない。そこで、地域課題を解決するソーシャルビジネスを起こして、出資という形で資金提供を受け、適切に還元しながら、結果的に地域も潤う仕組みをつくらうという発想だ。

そうしたい思いの実現に役買そうな施設が今年9月にオープンする。市内の東端、大船渡との市境に近い箱根山（標高446.8m）の中腹に建設中の「箱根山テラス」だ。地元の木材をふだんに利用した木造2階建て。眼下には風光明媚なリアス式海岸を望み、海からの風が心地よい。「テラス」は研修施設と宿泊施設の機能を備え、まちづくりや起業に関する研修やワークショップの会場として、また遠方から観光やボランティアに訪れる人の宿泊施設としても活用していくという。

建設にあたっては、口5万円の「応援株主」を募集。集まった750万円は初期費用の一部に当てた。国や自治体などの公的な支援ではなく、「陸前高田を応援したい」という人の出資によって復興を支える試みの第一歩といえる。「地元の人だけでまちづくりを進めるのは厳しい面もある。域外の人が楽しみながら関わり続ける仕組みが必要。箱根山テラスがその拠点になれば」と町野さんは期待を込める。

これまでなつかしい未来創造が牽引してきた箱根山テラス事業だが、7月に地域発で生まれた株式会社箱根山テラスにバトンタッチする予定だ。陸前高田や気仙地域のみなならず、全国の人々の間にも新たなつながりを生み出す場になるよう、9月開業を目指すして走り始める。



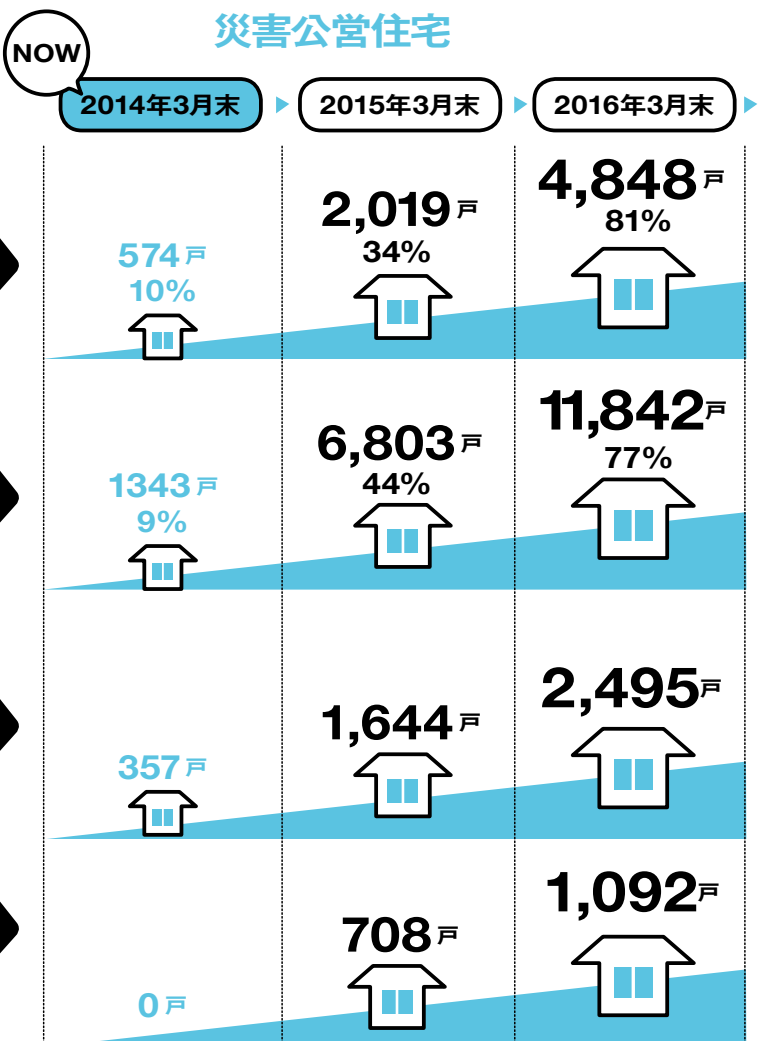
水産産業支援は6月だけでも4回の贈呈式・試食会が行われ、これまでに21の支援先に助成を行っている。  
写真=和田剛

Community  
PICK UP  
DATA

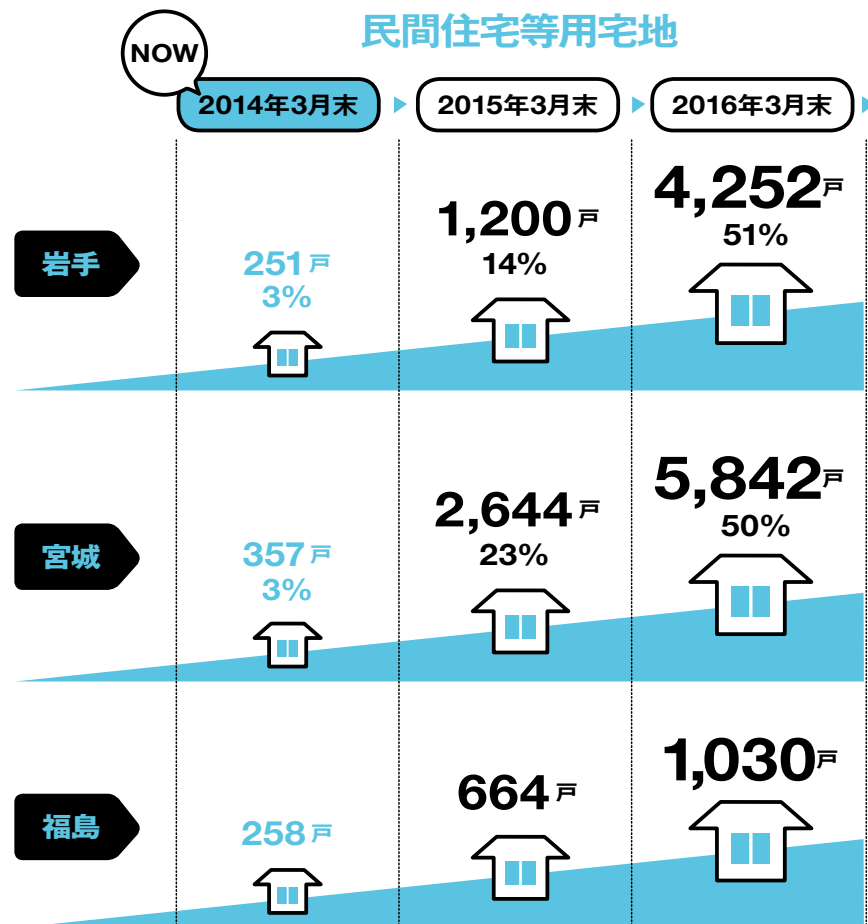
## 仮住まいから恒久住宅へ。住まいの移行いよいよ本格化

今後2年で公営住宅の8割・民間住宅地の5割が整備へ

災害公営住宅



民間住宅等用地



※民間住宅等用地は、土地区画整理や防災集団移転などにより供給する住宅用地  
※災害公営住宅は建物の引き渡し時期、民間住宅等用地数は宅地造成工事の完了時期  
(単位：戸、2014年3月末現在、復興庁調べ)

※福島県は計画策定中のため%は非表示

課題

災害公営住宅は人気にバラつき、資材・人件費の高騰も

入居率は各市町村、また同じ市内でも地区によってバラつきが生じている。石巻市では中心市街地の「駅北通り一丁目住宅」が5.8倍となる一方、津波被害の大きかった沿岸部の「門脇住宅」は0.3倍と不調だ。また、建設・土木業界における資材費の高騰や人材不足の影響で、入札不調や整備計画の見直しを迫られるケースもある。被災地の住宅再建を最優先に後押しするような施策を実行することが必要だ。

災害公営住宅の応募倍率

※各市町村発表情報より

岩手・大船渡市

(2014年3月現在)

募集戸数

734

申込数

713

0.9倍

福島(第1期)

(2014年2月現在)

募集戸数

528

申込数

1118

2.1倍

宮城・石巻市

(2014年2月現在)

整備戸数

2,368

登録世帯数

4,143

1.7倍

駅北通り一丁目住宅

整備戸数

65

登録世帯数

376

5.8倍

市内でも大きな差

中心市街地に申し込みが集中し、津波被害の大きかった沿岸部は敬遠されがちだ

門脇住宅

整備戸数

150

登録世帯数

39

0.3倍

災害公営住宅の高齢化率(50世帯以上)

|      |       |      |       |
|------|-------|------|-------|
| 山元町  | 53.3% | 仙台市  | 33.8% |
| 女川町  | 51.1% | 大船渡市 | 30.4% |
| 大槌町  | 44.5% | 釜石市  | 28.8% |
| 相馬市  | 44.0% | 石巻市  | 27.4% |
| いわき市 | 35.2% | 東松島市 | 23.1% |

※2014年5月1日現在、河北新報社調べ

## 宮城県石巻市蛤浜<sup>はまぐり はま</sup> 住民5人からの 再出発

# 小さくても持続可能な地域を いかにしてつくるのか？



自然 学校などの拠 点となるキャンプ場(上)は 2014 年 5 月に、ツリーハウス(下)は 2014 年 6 月に国道沿いのバス亭裏に、続けて完成した。  
写真提供 = 東北ツリーハウス観光協会



浜のビジョンを描き、周囲を巻き込む大きな力となったスケッチ(上)。亀山さんと共にプロジェクトを引っ張るリーダーの魚谷さん(中・右)と島田さん(下)



宮城県の三陸沿岸。

昨年オープンしたひとつのカフェが話題となっている。

石巻市中心部から車を走らせること 20 分。

牡鹿半島にある人口5人の小さな浜にできた

古民家カフェ「はまぐり堂」は、

1年で1万人を越える人を集めた。

代表の亀山貴一さんが描くのは、

カフェの成功だけでなく、まったく新しい浜の未来だ。

この小さな浜は今後も持続していけるのか？

そのためには何が必要か？多くの人を惹きつけ

様々なプロジェクトを形にする蛤浜の挑戦に迫った。

写真= Funny!! 平井慶祐



蛤浜再生プロジェクト代表

たかかず

亀山 貴一さん

2012年3月に蛤浜再生プロジェクトを立ち上げ。2013年3月には7年間働いた宮城県水産高等学校を退職し、現在はプロジェクトに全力を注ぐ。蛤浜蛤浜出身。



## すべては1枚の スケッチから

宮城県石巻市蛤浜、9世帯のみが暮らしていた小さな漁村の人口は、津波被害により3世帯、5人にまで減少した。浜の存続も危ぶまれる状況の中、この地で生まれ育ち、石巻市の水産高校に勤務していた亀山さんが、蛤浜再生プロジェクトを立ち上げたのは2012年3月のことだった。

地域の持つ魅力を最大限に活用し、人が集い、人がつながる浜をつくりたい。そう考えた亀山さんはそのビジョンを1枚のスケッチとして形にした。繊細なタッチで描かれたそのスケッチの中心には、ウッドデッキが特徴的なカフェ。周りにはレストランやギャラリーが並び、海辺はマリネリヤを築めるようになっていた。

観光客が来る事は皆無だったという浜で彼が描いた新たな姿とこの未来は、ボランティアや外部支援者たちを次々に惹きつけて行く。巨額の資金は集まらない中でも、できることから始めようと2012年秋頃に本格的にカフェの準備に着手。亀山さんの右腕となつてプロジェクトを引っ張つたのは、元々ボランティアで石巻に来ていた魚谷浩さん。ふるさと再生を誓う亀山さんのアツい思いとビジョンに共感し参画を決めたと言ふ。

共感した魚谷さんだけに留まらない。プロジェクトにはこの2年でのべ約3千人のボランティアが参加し、土地の開墾から家屋の修繕などの作業を手伝った。その他にも、協賛や社員研修などの形で多くの企業も蛤浜を訪れた。

## カフェを起点に 次々と動き出した 別プロジェクト

亀山さんのビジョンを元に、多くの人々の力が結集したカフェ「はまぐり堂」が完成したのは2013年の3月。古民家を改修した店内は大きなガラス窓越しに海を臨み開放感にあふれ、レトロな机や椅子、ちきゅう台に座布団が、人々の力が結集したカフェ「はまぐり堂」が完成したのは2013年の3月。古民家を改修した店内は大きなガラス窓越しに海を臨み開放感にあふれ、レトロな机や椅子、ちきゅう台に座布団が、

ん。カフェの裏手の古民家を借り受け、この夏のフレイオープン向け改修作業に汗を流す日々だ。またツリーハウスは、東北ツリーハウス観光協会とともに推進。国道沿いのバス亭のすぐ裏に特徴的なデザインで立てられており、蛤浜へ下る階段の大きな目印となっている。こうして、亀山さんの思いとビジョンに共鳴した仲間や関係者が絡み取り組み、新たな価値を生み出し続けていく。

数々のプロジェクトを進める亀山さんは、蛤浜を「学びの浜」にしたと話してくれた。「浜にある地域資源を、みんなでどんな活用すればいい。近隣の水産高校の生徒はここで外部の企業と連携をして未利用資源の商品化をする。漁家民泊のデザインには建築学生達が実践の場として関わってくれている。もちろん、キャンプ場で自然学校を行うこともできる。浜全体が教室になるのです。教室という例えは、元々高校教師だった亀山さんらしい発想だ。

この方向性の先に、浜に新たな収益源をつくりたいという思いがある。元々漁業以外に仕事の無い浜だったが、学びの浜となることで人の流れが生まれ、宿泊やコンテナから新たなビジネスが生まれることも考えられる。

そして、亀山さんは「浜の多様性が持続すること」を目指したいのだと言う。「復興事業を進める中では、複数の浜を統合する話もありましたが、それよりも、個々の浜が強みや特徴を伸ばして、バーチャルな統合ができないうちから考えています。例えば、蛤浜は学びの浜として外部と交わる拠点となる方、漁業や加工設備などは水産業に特化する隣の浜へ移す。また別の浜ではシェアハウスなどをつくり、住む場所として存続させる、といったよう。効率だけを求めて復興を進めた結果、もし小さな地域が無くなってしまつたら、それは多様性が失われることになりかねません。果たしてそれは豊かなのだろうかと思うのです。亀山さんの視野には、蛤浜だけでなく牡鹿半島全体の美しい未来図が入っています。」

「復興事業を進める中では、複数の浜を統合する話もありましたが、それよりも、個々の浜が強みや特徴を伸ばして、バーチャルな統合ができないうちから考えています。例えば、蛤浜は学びの浜として外部と交わる拠点となる方、漁業や加工設備などは水産業に特化する隣の浜へ移す。また別の浜ではシェアハウスなどをつくり、住む場所として存続させる、といったよう。効率だけを求めて復興を進めた結果、もし小さな地域が無くなってしまつたら、それは多様性が失われることになりかねません。果たしてそれは豊かなのだろうかと思うのです。亀山さんの視野には、蛤浜だけでなく牡鹿半島全体の美しい未来図が入っています。」

「復興事業を進める中では、複数の浜を統合する話もありましたが、それよりも、個々の浜が強みや特徴を伸ばして、バーチャルな統合ができないうちから考えています。例えば、蛤浜は学びの浜として外部と交わる拠点となる方、漁業や加工設備などは水産業に特化する隣の浜へ移す。また別の浜ではシェアハウスなどをつくり、住む場所として存続させる、といったよう。効率だけを求めて復興を進めた結果、もし小さな地域が無くなってしまつたら、それは多様性が失われることになりかねません。果たしてそれは豊かなのだろうかと思うのです。亀山さんの視野には、蛤浜だけでなく牡鹿半島全体の美しい未来図が入っています。」

「復興事業を進める中では、複数の浜を統合する話もありましたが、それよりも、個々の浜が強みや特徴を伸ばして、バーチャルな統合ができないうちから考えています。例えば、蛤浜は学びの浜として外部と交わる拠点となる方、漁業や加工設備などは水産業に特化する隣の浜へ移す。また別の浜ではシェアハウスなどをつくり、住む場所として存続させる、といったよう。効率だけを求めて復興を進めた結果、もし小さな地域が無くなってしまつたら、それは多様性が失われることになりかねません。果たしてそれは豊かなのだろうかと思うのです。亀山さんの視野には、蛤浜だけでなく牡鹿半島全体の美しい未来図が入っています。」

「復興事業を進める中では、複数の浜を統合する話もありましたが、それよりも、個々の浜が強みや特徴を伸ばして、バーチャルな統合ができないうちから考えています。例えば、蛤浜は学びの浜として外部と交わる拠点となる方、漁業や加工設備などは水産業に特化する隣の浜へ移す。また別の浜ではシェアハウスなどをつくり、住む場所として存続させる、といったよう。効率だけを求めて復興を進めた結果、もし小さな地域が無くなってしまつたら、それは多様性が失われることになりかねません。果たしてそれは豊かなのだろうかと思うのです。亀山さんの視野には、蛤浜だけでなく牡鹿半島全体の美しい未来図が入っています。」

並びどこか懐かしさが感じられる。オープン後に多くの雑誌などで「オシャレなカフェ」として紹介されたのも納得だ。

オープンから今年の2月までの1年で1万人が訪れ、3月以降も集客は順調。今年は2万人に届きそうな勢いだ。そんなファウェイがもたらしたの、売上以上の効果だった。「1年かけてやっとカフェのオープンにこぎ着けた。息つく暇もなく、他のプロジェクトが次々と動き出したんです」と亀山さん。キャンプ場に漁家民泊、ツリーハウスという異なる3つの企画が、わずか半年ほどの間に具体化し、いずれもこの夏までのオープンというスピード感で進行している。

「震災から時間がたち、ボランティアの受入ができる場所が減ってきましたが、東北で何かやりたいという外部の方のニーズは依然としてありまして。カフェで今まで以上に多くの方にお会いできるようにするために、僕はカフェの先やりたいことが沢山あったので、様々な形で多くの方を受け入れることができました。元々持っていた人を惹きつけるビジョン、それにカフェという集客装置が加わることで、加速度的に物事が動いていった。

## 学びの浜、 そして多様性が 持続する未来へ

新プロジェクトの中でもいち早く形になったのが、約300坪のキャンプ場だ。バンクオブアメリカ・メリリオンなど外部の企業や財団、団体からの支援を受けて今年5月にオープン。自然の中で生きる知恵や防災・減災を学ぶコンテナ、カヤックやシュノーケリングなどのマリンスポーツ体験メニューなどを整備し、一般開放はしないが子ども向けの自然学校や企業研修の受入拠点として活用していく。平行して進められているのが、漁家民泊「ツリーハウスの建設だ。漁家民泊プロジェクトのリーダーは、亀山さんとは震災後の泥かきボランティアの時期からの付き合いという島田暢さん。

## 日本を旅して見えた 地に根をはる大切さ

ビジョンを具体的に描き、それに惹かれる人たちに実践の機会を提供すること。キレイな戦略や条件を整えるよりも、できることからまず実践すること。亀山式のリーダーシップを整理するとまずこの2つがあるだろう。そこにもう一つ加えるとなると「地に根をはる」というものがある。表面的なデザインやノウハウではなく、地域の本来の魅力を見つめ続け、地域に長くとけ込むものは何なのかを、愚直に追求める姿勢だ。

この考えに至るには、蛤浜再生プロジェクトを始めた時に日本全国の地域おこし事例を見て回った影響が大きいと亀山さんは言う。瀬戸内芸術祭や尾道の空き家再生プロジェクト、島根の岩見銀山の宿、海士町、長崎の小値賀島の民泊、沖縄の自然学校、岩手の森と風の学校など、各地の好事例に聞くといくつもの何なのかを、愚直に追求める姿勢だ。

「僕らは震災復興支援ということで、人や資金が集まり易い環境にありましたが、彼らは誰も知らないところから始めて20年30年続けて来ています。その精神力には本当に脱帽です。地域の暮らしをなにともしに残したいという情熱がものすごい。」

目標とするこうした先人達がいるからこそ、困難に直面しても諦めず続けることができてくる。亀山さんは話す。復興作業も一定の目処がたち、話す生活も落ち着き始めている。新たなファウェイに入ってきたからこそ、今後はスピードを少し緩め、地元民とのコミュニケーションをより丁寧にしてきたらいいと亀山さん。今日も多くの仲間とともに、蛤浜で汗を流していることだろう。



# T 観・食・遊 ravel



vol.9 岩手県

## 南部鮭加工研究会 鮭冷燻・ケズリ

原料は鮭と塩のみ。  
胃袋を掴まれる懐かしい匂い

「パスタにふりかけたら綺麗ね」、「クリームチーズと合わせてディップにしたらオシャレかも」。南部鮭加工研究会の「鮭冷燻・ケズリ」が届いた際、こんな妻の提案を振り切り、まずはシンプルに「ご飯の上にふりかける」を選択した私。炊きたてのご飯の上の妖艶なダンスと、沸き立つどこか懐かしい匂いに我を忘れ、一気に胃袋へと流し込まずにはいられなかった。

産卵期に川を遡る過程で、雄の鼻が曲がることから「鼻曲がり鮭」と呼ばれる岩手県沿岸の鮭。

その特徴は脂肪が少なく臭みがないことで、燻製などの加工に適していると言われる。ナラ、ケヤキ、クリなど、地元の広葉樹を使い15～20度の低温でじっくりと燻すことにより、鮭に旨味成分を十分に吸収させる。更に乾燥し硬くなったものを削り、生ハムのような食感の逸品が完成する。鮭と塩のみのシンプルな素材に、冷燻独特の豊かな香りが加わり食欲をそそるのだ。川で生まれ、海へ下り、遥かアラスカ沖まで旅をして、再び生まれた川へ還ってくる鮭。4～5年

を経ても故郷を覚えている理由は未だ解明されていないが、有力な説は生まれた川の「匂い」を記憶する本能だと言われている。人間も故郷を遠く離れて何年も過ごしていると、無性に懐かしさが募る時があるが、「鮭冷燻・けずり」から放たれる匂いが、本能に訴えかけてくる気がするのには偶然だろうか？

最近新婚生活が始まった私。次回は妻の意見を受け入れ、胃袋をさらに驚嘆みされることで、尻に敷かれていくのは必然だろう。(K)

<http://www.sakereikun.fhd.jp/index.html>



vol.1 宮城県登米市

## 地域の魅力を発信する「東北風土マラソン」

多様な関係者が協働

今春、宮城県唯一のフルマラソン大会「東北風土マラソン」が開催された。「ランナーも、ランナーじゃなくても楽しいお祭りマラソン」をコンセプトに、順位や記録を競うだけでなく、ご当地グルメを味わったり風景を楽しみながら走れる点が特徴だ。スタート・ゴール地点では物産展や日本酒のきき酒コーナーを同時開催。さらに、ランナー向けの酒蔵ツアーや被災地訪問ツアーも併催するなど、観光団体、スポンサー企業、地元事業者などが一体となって地域の魅力を発信し、復興途上の東北に観光客を呼び込む新たな取り組みでもあった。

当日、全国から登米市に集まったランナー、ボランティアは1,500人以上。大会前日には登米市内の宿泊施設が全て満室になり、近郊の道の駅は通常の2倍以上の売上を記録した。マラソンのコース途中ではランナーに南三陸の

「たこの唐揚げ」、登米の「はっと汁」、気仙沼の「フカヒレスープ」など東北各地の名物と、日本酒の原料となる仕込み水が振るまわれた。さらにゴール地点では、完走者には升と宮城県産の米、日本酒の利き酒チケットを配布。大会後に実施したアンケートでは、「満足」と回答したランナーは97%に達した。登米市観光物産協会会長の阿部泰彦さんはその成果をふまえ、「登米市最大のイベントとして今後も取り組みたい」という。さらに、スポンサーの1社である株式会社アシックスは、組織風土醸成の機会としても活用するなど、イベント協賛の新たな可能性も示した。

地域に人を呼び込むイベントの成功の秘訣は、立場も利害も異なる多様な関係者たちが協働したことにあった。彼らはどのように一つにまとまったのか。その詳細は東北復興新聞 web 版で。



vol.9 岩手県一関市

## 「矢びつ温泉 瑞泉閣」

平泉の荘園で入るのんびり田園の湯

奥州藤原氏の権勢を今に伝える平泉・中尊寺。その荘園として栄えた旧骨寺地区にある矢びつ温泉は、懐かしい農村風景の中に立つ一軒宿だ。東北新幹線の一関駅から車で30分の好立地で、ビジネスバックあり、無料送迎あり。東北に通う身にはありがたい宿ということで訪れた。

一関駅から車に乗り宿を目指すと、途中には奇岩が点在するエメラルドグリーンの巖美溪が見えてくる。ここでは寄り道して名物の郭公団子をお勧めしたい。東屋で木槌をコンと鳴らすと川向うからロープをつたって団子が下りてくる。時代劇の1シーンで見たようなレトロ感を味わったら、いよいよ宿のある旧骨寺地区へ。

田植えが終わったばかりのみずみずしい田園風景は、今も中世荘園時代と変わらない景観を残すという。

平成元年に温泉が湧いたこの地は、かつては歩いてしか行けない秘湯だった栗駒山麓の須川高原温泉へ湯治に行く人々が山に入る起点だった。宿についたら、さあ温泉へ。巖美溪に流れ込む磐井川の渓流を見下ろす露天風呂は、川もやに包まれて、夜空には天の川が見える。朝が来れば遠くには田んぼも見渡せる。弱酸性でなめらかな肌触りの湯につかり、旅の疲れを癒したら、土地の食べ物に元気をもらおう。黄金こめ豚やしょうが餅など、料理はどれも素朴だが



しみじみおいしい。「なーんもないこです」と宿の人は言うけれど、こういう田舎が都会人には何より嬉しい。東北に行くならビジネスホテルではなく田舎の温泉でのんびりしたい。そんな夢を叶えてくれる田園の秘湯だ。(L)

お問い合わせ: 0191-39-2031

## 東北復興新聞 WEBサイトから

東北復興新聞WEBサイト (<http://www.rise-tohoku.jp>) では、紙面に掲載した以外にも復興現場の記事が掲載されています。通常記事の他にもイベントやツアー、助成金などの情報も満載。ぜひご覧下さい。



企業による  
復興支援のこれから

vol.7 【アクセントチャプ】

コンサル視点のCSRで  
東北の若手起業を支援



年間150万人来場、  
売上30億円のマンモス朝市

【青森県八戸市】

盛り上がる「館鼻(たてはな) 岸壁朝市」  
運営の秘訣



シリーズ  
「他地域に学ぶ」

vol.13 【福岡県津屋崎町】

移住者を着実に増やす  
「福岡の田舎」に流れる哲学